

「古き良き渋谷」に育つ

文人の 武蔵野

大岡昇平(1909〜88年)は、武蔵野の文人です。代表作に「武蔵野夫人」(1950年)があるからでもありませんが、「武蔵野の面影を残した古き良き渋谷」をふるさととする文学者でもあり、その点では、渋谷を武蔵野とした国木田独歩や与謝野晶子・寛夫妻からの系譜に連なると言えます。

1909年3月、東京市牛込区新小川町に生まれた大岡は、麻布区筈町、三河台町を

大岡昇平 ①



大岡昇平(1978年撮影)

経て4歳の時に豊多摩郡渋谷町に転居し、20歳過ぎまでは自宅が渋谷にありました。大岡自身、みずから住んだ渋谷を「武蔵野の面影を残した古き良き渋谷」と称し、「田舎から上京してきた貧しい人々が住む場末地域」だったと回想しています。他方で、13歳の頃には父親が株で莫大な利益を得て高級住宅地だった

松濤に家を購入したため、同じ渋谷でも全く異なるエリアに転居しています。

大岡は、貧しい上京者の渋谷とそうではない渋谷の双方を冷静に見つめる目を養える環境にありました。そこが上京者だった国木田独歩や与謝野晶子・寛夫妻との違いであるように思われます。

若き日の大岡は、株式売買の外交員をしていた父親の職業に反感をおぼえ、聖書や讃美歌を通じてキリスト教への信仰心を身生えさせます。特に松濤に住んでは大いに文学に親しみました。1923年、14歳の時に関東大震災を経験しますが、大岡家はほぼ被災していません。朝鮮人襲撃の流言を通じて大人を軽蔑し、大杉栄・伊藤野枝虐殺事件を通じて、軍人への不信を抱くようになりました。マルクス主義に関心をもち、ラ

ンボーを読むためにアテネ・フランセに通い、19歳の時には、小林秀雄と中原中也からフランス語の個人教授を受けています。

戦後文学のベストセラー小説「武蔵野夫人」では、渋谷ではなく小金井を「武蔵野」に選び、作品の舞台にしています。フランスの心理小説に学んだ形式をとった「姦通小説」であり、また東南アジアからの復員兵を描いた文学でもあります。武蔵野の地形の変化や地価の変動、法律の改廃なども作品の重要な要素となっています。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

*

過去の連載は、読売新聞オンラインで読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。

